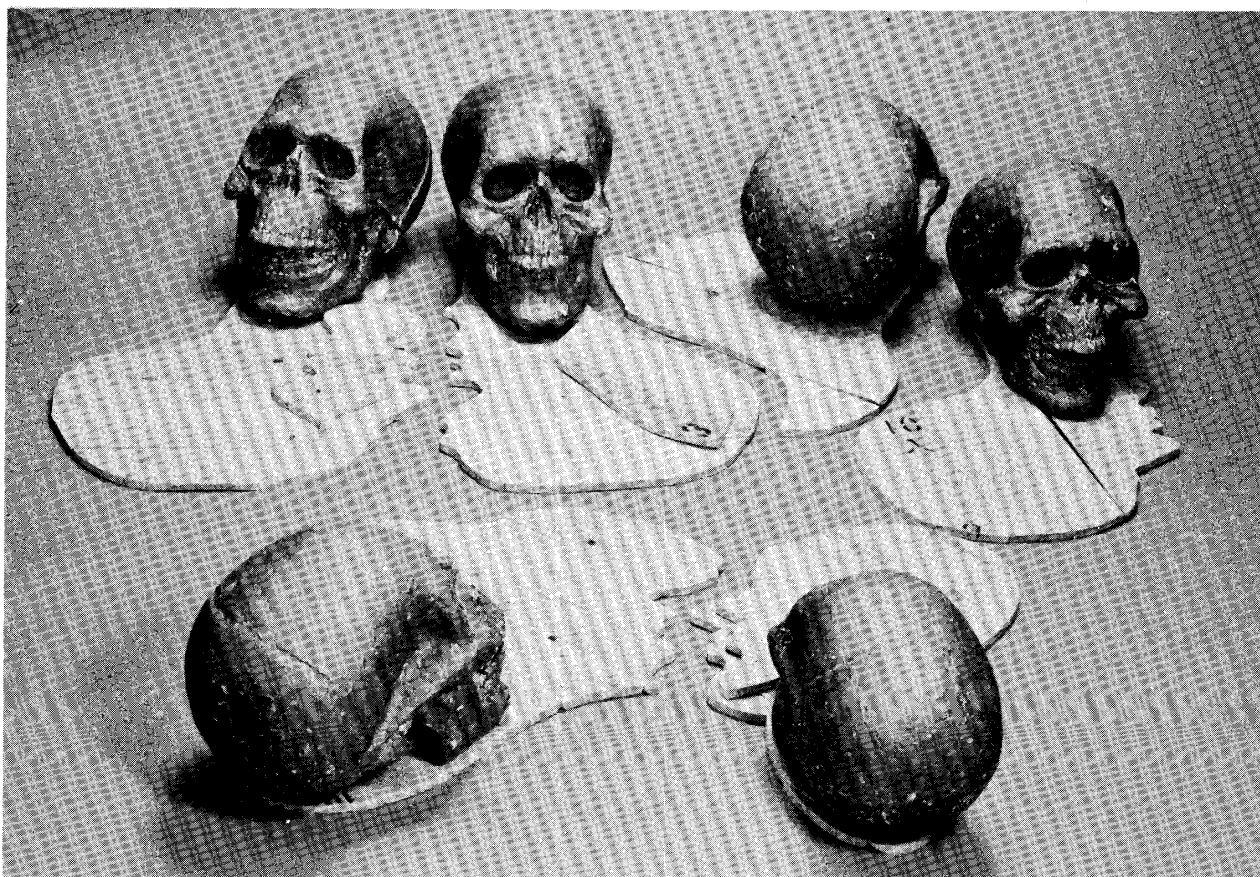


「DANRAN」

“Harmonious Group”

平 山 史 郎



九州現代美術「幻想と情念」展

1974・2・19~24

題 名 「DANRAN」

氏 名 平 山 史 郎

種 類 彫刻

大きさ 35cm×150cm×150cm

制 作 1974年1月

表皮のところにさえ末だ届いていないという未熟な部分を、取り出そうというのである。それは決して容易なことではない。それが奥まった処に居て定かなかたちを持たないでいるから、手の施しようもないくらいに難しい。万事打つ手なしと言った方が本当はあたっているのかも知れない。その事を言ってしまうとお仕舞いになるので、何や彼やあらぬ言いがかりを付けて適当にこねくり廻しているうちに飄蕩から駒のたとえを、心の内で期待しながらの作業を続けている。奥へ分け入ってその底に沈んでいるもののほんのかけらでいい、掴み取りたいものである。

そうした願いが祈りにまで深められ、あるいは高まる時に初めて求めているものの本体が、何者であったかを知るのではあるまいか。

僅かばかりのささいな行為を積み重ねていく事で、今は気休めを得ている。私的で個人的な領域内でこれまでの間に、視覚化されていないものにかたちや空間を貰いたいと思っている。

多くの人たちがいろんな通路をくぐりながら、そうしているうちに意識の表へ汲み上げて来た数々の「美」のうち酒に酔い痴れながら、それらを辿ってみるのも一つの有り方ではあろうけれども、そうそう手順よくなぞって喜んでばかりも居られまい。退屈という種類の得体の知れない厚い壁に密閉され、すっかり澱んでしまっている空気のみせかえる部屋の中空に自らを委ねざるを得ない佗しきの事を思う丈でうんざりしてしまう。

観念的であってもいい、ずーっと遠い向うの地点まで見通しのきく自身の居場所が確保され、そこに風を創り出して内側からのねばねばした可塑性とか伸縮性とかの培養を、いよいよ活気あるものとしていきたい。

ものを作るという事は言わばそうした己の中身を、掘ったり耕したりして、肥えた土づくりをするようなものであって決して衣裳をまとうためのものではない。内から突き上げて来る湧き水の質を一つ一つ吟味していくようなものであろう。

冬の凍結した土肌からはすでにあおい芽がちいさないのちを覗かせている。からっ風に吹き寄せられて来た枯葉が再び土の中へ還ろうとしている。根っ子の部分で、盛んに青い胎動が始まっている。跡絶えてしまったかと思われていた草や木の新しい息吹きが、木枯の音に混って微かに聞えてくる。可成り大仰な表現である。大袈裟な言い廻し方の創り出すざわめきが、時折予期していなかったものまで運んで来てくれることで、意外な儲けもをした経験による病付きがいつもの通りにはばをきかせている故の手だてのものである。

日頃身近かな処に横たわる、あるいは転がっているものの無造作でいて、しかしかけがえのない語らいに耳をすまして聞き入る暮らしをして居れば、何の苦勞なくじかに伝ってくるものを、それを省いていた為に慣れない事をやるものだから、つい肩に力が入り過ぎてそれで硬直してしまった五体のバランスがとれずに、ひょいと大ものを言ってしまった。

もたもたしながら、重い足をひきずりひきずり歩いて

いる。此の辺で兎に角始めねばならない。始めたいと言うのは掛声ばかりでいつもからっ風がびゅうびゅう吹き荒れている。それで足が凍んでしまって前へは一步も進めはしない。誰だって同じだよと言われれば、それまでのこと。私ひとりだけが特別な暮らしをしている訳ではないし、今や何処にも逃げ場はない。

目に見えぬ未開の情念を手に触れることが出来るかたちに置き換えることは並大抵のことではない。

何はともあれ、何かを終らせねばならぬ。終りがそのまま始まりになるからである。朝が一日の始まりであるのならば、夜の眠りはひとつの終りであるように。

役割を果たしたものたちが、夫々の仕方燃やしてきた温もりを枕に、心地良い眠りに浸れる空間の創造が待たれている。

そんなこんなを想いめぐらせている内に、頭骸骨が六個出来ていた。作り上げたのを並べて観るのである。一列にしてみたり円い輪状にしてみたりいろいろ操作している途中で、だんらんの図が浮んで来た。

すると今度は、いくつもの思念がそれからそれへと気儘に脹らみはじめて、だらしく広がっていくばかりであった。丁度重荷の車が坂道を登りきったところから、あの弾みに乗ってずるずると駆け下るのに似て、巡りめぐっているばかりであった。しかしそうした類の気軽に舞い込んで来た想いなどというのは、結局のところ頭の中だけを素通りして行って、落着くしまもないといった感じで、次から次へと弾けては消えてしまった。まるでシャボン玉である。

初めにおずおずしながら少し恥らい加減のだんらんが最期まで居座り続けているのに気が付いて、ほろりとさせられた。そこは人の子の弱いところだし、そこが勘どころと知れば、応じない訳にいかない。

はっきりしたかたちを観るまでには、種々様々のおもいが通り過ぎ吹き抜けて二番目はすらすらと駄目になり、三つ目は噛みこなしている時の歯触わりが気に入らず途中で置き去りにした。四番目に迷い込んで来たのは喰いちぎってから放り出してやった。後のは不消化のまんま吐き捨て、しまった。

此処までくれば如何に重たい荷車といえども軽うなり沢山の想いで一杯の荷台にすっきりなえていた私は、厄介な重みのすべてがこれで片づいたと思ってほっとしているそのすぐ裏側に居て、もう半ば自棄気味の際に立ってしがみ付いていたのが「DANRAN」。